



～ 思春期を生きる（3）～

校長 小木曾敏樹

人は変われる。

簡単なことではないかもしれないけれど、人は変われる。そう思う。

毎日毎日、大好きな野球ばかりして、日が暮れ

て薄暗くなるまでボールを追いかけていた野球小僧の小学生は、中学に入学してすぐに、真っ暗な出口の見えないトンネルの中に入ってしまった。

クラスは一部のふざけた人たちに支配され、担任も見て見ぬふりをし、教室に自分の居場所はないと思った。

いやみ、悪口、冷たい態度、明らかな差別・・・、先輩からも仲間からもそんな仕打ちを受け、部活にいられなくなり大好きな野球も、やめた。

体育大会の練習では、見えない所で何回も蹴られ、我慢我慢してこらえていたが、止めろよと一発だけ蹴り返すと、蹴られたと大騒ぎされ、放課後に10数人に囲まれ、やられそうになった。周りには友達だと思っていた人たちが何人かいたけれど、誰も何も言わなかった。止めてもくれなかった。ある一人がすきを見て私の手を取り、その暴力の輪から連れ出した。「逃げるのか、卑きょう者」と罵声を浴びせられ、戻ろうとしたがみんなに止められた。私はその日から卑きょう者になった。一緒に戦ってくれよ・・・。自分には友達はいないと、その時思った。

体育大会当日のラストの競技、選手リレーに選ばれたが、足を引っかけられ（わざとではない）転んで最下位。全校からあいつのせいで体育大会は負けたと指をさされた。

毎朝鼻血が出ていたが、このころから家でも学校でも貧血で倒れることが多くなり、医者に運動禁止と言われ、私の中1は終わった。嫌なことばかりを思い出して、眠れなくなった。夜が怖くて、眠くなるまでギターを弾いたりラジオの深夜放送を聞いたりして、昼と夜が逆転する生活になった。学校に行きたくない日、学校に行けない日、学校に行かない日、その三択しかなかった。そのうちに、行けない日と行かない日しかなくなっていった。

きっと心が病気になりかかっていたのだろう。自分のことがどんどん嫌いになり、周りの目が怖く感じるようになった。きらわれている、イヤがられている、避けられている、自分は汚いからと思うようになった。坊主頭だった野球小僧は、髪を肩まで伸ばして顔を隠した。

2年生になっても心はスッキリすることなく、暗いトンネルの中にいた。しかし、少し違ったのは、トンネルの先に出口のような光が見えていたことだった。このままでいいのか。自分はこんな人間なのか。本当の自分はこんなじゃない・・・。もんもんとしていた。

3年生になった。きらわれているといった思い込みはなくなったけれど、自分のことは好きにはなれなかった。このままではダメだ。自分は変わらなきゃと思った。生徒会執行部に友達が立候補したこともあり、委員会の委員長に立候補してみた。落ちるだろうと思っていたが、なぜか当選してしまった。「あんなに上手く話されたら勝ち目ないわ」と落選した候補から言われ、話すのがもしかしたら上手いのかと、自分でびっくりした。委員長になってからは、一生懸命に委員会の活動を盛り上げた。いろいろなアイディアを出し活躍できた。人の前に立ち、目立つことが



多くなった。それにだんだんと慣れてくると、それがどんどんと自信に変わっていったように思う。後期も是非委員長を続けてくれと顧問の先生に頼まれたけれど、私は学級委員をやる、クラスを中心になると決めていた。

後期、学級委員になると、担任が1カ月間海外研修に出かけ、先生が誰も来ないクラスになった。朝・帰りの会も、学級活動の時間も、担任の役は私がやった。副担任の先生はたまに来るくらいで、ほとんど生徒たちで生活をした。私はクラスを中心として認められた。そういういい仲間たちが周りにいてくれた。2年前、私を苦しめた人たちは他のクラスにたくさんいる。あの日「卑きょう者」と私に言い掛った卑きょう者たちも、学校での私の存在感には勝てなくなっていた。

思春期と人間関係でボロボロだった中1と、自信を取り戻し自分らしく輝けた中3とは、全くの別人とっていい。変わろう、変わらなきゃと思って、冒険してみたことが、人生を180度変えることになった。

自分だけじゃない。教師になって、自分を変えた生徒たちをたくさん見てきた。

赤面症の女の子がいた。人前で話すことはできない。先生から順番に指名され発言しなくてはならない場面では、数人前から顔が真っ赤になり、涙が出てしまう。



彼女の声を聞くことはめったになかった。でも、仲のいい子とは話しているから、赤面症は治るのではないかと思った。国語の授業で、ディベートという言葉の、討論のスポーツを行った。原稿なしで意見を戦わせる討論のゲームだが、彼女だけは原稿を読んでもいいことにした。最初はやっぱり、原稿があっても真っ赤な顔になり、泣き出していた彼女だが、みんなと同じようにやると心に決めたらしい。2回目、3回目と、顔はやはり真っ赤だったが、泣かずに読めるようになり、声も少しずつ大きくなっていった。どんどんと彼女は変化し、やがてみんなと同じようにノー原稿で参加するようになった。すごいことです。赤面症を克服してしまったわけです。それどころか、なんと彼女は、後期の委員会委員長に立候補し、委員長になった。そして、高校に入ると教師を目指すと言った。結局は教師にはならなかったけれど、保育士としてどこかで働いている。

勉強もしない、掃除もしない、学校行事にも真面目に取り組まない、そんなぐうたらな子たちが、3年生になり突然変わることはよくある話です。中3ばかりを担当していたから、そういう変化を何人も見てきました。どの先生も、きっと巡り合ったことがあるのではないのでしょうか。

ぐうたらとか、やんちゃではなく、おとなしくて、いるのか、いないのかさえ気づいてもらえないくらいの、影の薄い男子生徒の話です。目立たない存在で、勉強でも良くも悪くもなく、発言もあまりしない、そんな彼でしたが、教師のカンってやつでしょうか、彼は何か持っていると感じていました。保護者との懇談会があり、私はお母さんに、彼はいつかリーダーになると言いますと言った。お母さんはめちゃくちゃ喜んだあと、でも先生、あの子はそういうタイプじゃないから無理です。そう言ってもらえただけでうれしかったですと言った。本人との面談で、リーダーになりたいんだろ？と聞くと、いや～、別に・・・という反応でした。しかし、後期、彼はいきなり学級委員に立候補し、それまでの彼のイメージを一変させ、めちゃくちゃ存在感のある人間になった。「化けた」という言葉が当てはまる。彼は、先生の言葉が自分を後押ししてくれた。やってやろうと思えた。自分を変えることができてうれしいと言っていた。

人は変わる。でも、変わらなきゃいけない訳ではない。大人になり、社会で、仕事で、地域で、いろいろな経験を積んでいけば、みんな成長し変わっていくものだろう。だから、無理に自分を変えようと思う必要はない。今のままでみんな素敵だと思う。

でも、私のように自分に自信がもてず好きになれないとか、自分自身が本当の自分はどんな人間なのか、どんな可能性があるのか全く分からないという人は、変わってみようとするのもいいのではないかな。人は変わる。必ず今より成長できる。必ず今より楽しいことが待っている。